



弘大農学生命科学部 同窓会会報

第37号

令和元年5月 発行
発行 弘前大学農学生命科学部同窓会
TEL 0172-36-2111
FAX 0172-39-3750
振替 02340-7-564
印刷 (株) 笹 軽 印刷



白神自然観察園に咲くカタクリ



白神岳中腹のブナ紅葉



白神自然観察園 厳冬期 東屋



学部の発展と同窓生の活躍に期待

同窓会長 — 戸 洋 次

今年が平成から令和への改元という記念すべき年であり、新しい時代の幕開けを心よりお祝い申し上げます。

また、同窓会の会員の皆様にはますますお元気でご活躍のことと心からお慶び申し上げますとともに、日頃からの同窓会へのご支援に対しましても深く感謝申し上げます。

さて、私たちの農学生命科学部は昭和30年7月に農学部として設置されて以来、昭和から平成へと64年の年月を経て7,846名に及ぶ卒業生、研究科修了生は1,152名を数えるまでとなりました。

この間に学部は何度かにわたる改組を経て、平成28年度には「生物学科、分子生命科学科、食料資源学科、国際園芸農学科、地域環境工学科」の5学科に再編成され、地域や時代の要請に応じて食産業に貢献できる人材や海外研修の導入による国際的な視野を持って活躍できる人材の育成などの特色ある取組みを進めています。

これは弘前大学の「世界に発信し、地域と共に創造する」という基本理念のもと、人材輩出や技術・経営革新に向けた地域連携・地域貢献への取組みを加速しているあらわれであり、学生の皆様も期待される社会人に成長されるよう、充実した教育・研究環境の中で研鑽を積んでいただきたいのであります。

ところで、日本経済新聞社と日経HRが実施した上場企業等への調査による「価値ある大学2019年版～就職力ランキング」の結果が昨年6月に発表されました。これによると、弘前大学が「採用を増やしたい大学」のトップとなり、さらに学生イメージと大学取組みイメージ19項目からなる総合ランキングでも21位、そして大学の取組みでは「地域の産業・文化に貢献」で2位などと高い評価を得ています（同封の全学同窓会報20号キャリアセンター紹介記事や弘前大学ホームページのトピックス2018.6.6を参照）。

このように企業の人事担当者が弘前大学の卒業生や大学の取組み・人材輩出力を評価しているこ

とから、今後、企業や組織、社会活動の原動力となる同窓生にあっては大いにやる気を発揮してキャリア形成に向けて頑張ってもらいたいのであります。それによって後輩や母校、地域関係者との相互の波及効果、好循環を期待できることとなります。また、このような大学ランキングのほかにも、近年弘前大学の研究・教育、地域活動など特筆すべき取組みが全国的にも紹介され、高く評価されていることから、その維持向上につながるよう引き続き大学、学部、関係者のご尽力を期待するところであります。

地域の関係者としては、「地（知）の拠点」を目指す大学とともに発展していく観点から大学、学部への支援が重要でありますので、同窓会としても、活動の活性化を図りながら可能な限り努めて参りたいと考えております。

さて、同窓会では2年毎に総会を開催しています。今年はその開催年に当たっており、13ページのご案内のとおり7月に青森市で開催することになっています。

近年、総会への出席会員はとても少ない状況となっておりますが、いうまでもなく総会は同窓会の実施事業や会計、役員選出など会の運営方針を決定する重要な場であり、総会終了後の懇親会においては会員の皆様が一堂に会し、旧交を温め、世代間の交流を図る貴重な機会でもあります。会員の皆様には、職場の若い会員にも声を掛け合うなどして多くの方々のご参加をいただきますようお願いするところであります。

また、前号でお願いしました会費納入についても引き続きご理解を賜りたいことと併せて、同窓会を盛り上げるためにも皆様からのご意見や支部同窓会・会員の活動状況などの情報提供、会報への投稿も大いに歓迎しております。

以上、お願いばかりになりましたが、新たな時代のスタートの年に当たり学部、同窓会の更なる発展や同窓生の皆様の益々のご活躍、ご健勝をお祈り申し上げます。



農学生命科学部の学部改組後の近況

農学生命科学部長 佐々木 長 市

同窓会ならびに関係の皆様には、平素より学部に対する協力等をいただき心より感謝申し上げます。地域貢献が地方大学の大きな使命としての認識がますます高まり、同窓生各位の協力は、地域から必要とされるより良い大学及び学部づくりに欠かせないことと思っております。

弘前公園のさくらの開花は、例年より早く4月19日と予想されております。まだお城は移動したままとなっております。また、今年は平成と言う元号から、新元号となる年となります。平成という時代は、食の簡素化（短時間で調理できるもの）あるいは食生活の変化が顕在化（乳製品の消費増など）した時代であったと考えております。同窓生各位にとっては青春時代のかげがえのない時期を過ごした地であるかと思えます。この会報を手にし、母校への叱咤激励をお願いしたいと思います。

今年が学部改組後3年目になります。農業の国際化の進展、AIの農業への応用、少子高齢化や地方の人口減などの地域の抱える課題の一端を見据え、地域の課題を汲み上げる形で改組を進めておりますが、卒業生の輩出はこれからになります。就活のために皆さんの職場に訪問することもあると思えます。改組では、食に関する基本知識を持った地域の食産業に貢献できる人材の育成を改組の一つ目の柱としております。また、青森県農業の成長産業化を推し進めるうえで、グローバ

ルに活躍できる人材あるいは農産物の取引に強い人材の養成は重要と考え二つ目の柱としております。こうした地域の特性や要請を踏まえ、これまでの生物資源学科に食品コースを増設し、学科名を食料資源学科と改称しました。また、園芸農学科には、国際的な農産物の取引に精通した教育を強化し、学科名を国際園芸農学科と改称しております。この学科では、2年次に学生全員を1週間程度の海外研修させることを必修としています。現在中国、フランス、タイ、アメリカ、ニュージーランド等の国で研修をしております。このほかの4学科も選択ですが、海外研修を実施しております。

来年度は、全学の協力で「地域共創科学研究科」が2020年4月から新設される予定です。本学部の食品関係教員と農業経済関係の教員が新しくできる研究科に移ることで準備が進んでおります。また、6月1日（土）には、皆様の協力のもとに大学創設70周年記念事業を行う予定です。同窓会各位及び後援会各位の多大なる協力と理解の賜物と深く感謝申し上げます。寄付金の一部は学部の活動も広く支援される形となっております。何卒記念事業の趣旨に賛同いただき、寄附等の協力を宜しくお願い申し上げます。

今後とも同窓生の皆様の変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、皆様のますますのご健勝とご活躍を祈念しております。

事務局から

平成17-18年度総会で「弘前大学農学生命科学部同窓会における個人情報の取り扱いについて」が制定されました。支部会開催などで、会員情報が必要な際には「同窓生情報活用依頼書」を郵送またはファックスでお送り下さい。様式は会報第23号（2005年6月1日発行）の10ページにあります。

同窓会ホームページ（<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>）からもダウンロードできます。



農学生命科学部附属 白神自然環境研究センターの紹介

センター長 石川 幸 男

白神山地と弘前大学

青森・秋田県境の日本海側に位置する白神山地は全域で約13万ヘクタールあり、その一部の約1.7万ヘクタールがユネスコの世界自然遺産に登録されています。世界自然遺産地域内では、東アジアで最大規模の原生的なブナ林（写真1）が広がっていることから、生態系としての価値があると認められて遺産に登録されました。ここでは、原生的な生態系ではあるものの、古くからマタギとして知られた狩猟者がツキノワグマなどの獣を生活の糧とするなど、自然利用の歴史があり、さらにふもとでは白神山地から供給される水と土砂が作り出した平野を利用して稲作が行われるなど、長い間、自然の恵みを受けて人々の生活が続けられてきました。

白神山地から至近の距離にある弘前大学もまた、白神山地の自然とそれに深いかかわりを持つ文化などについて、さまざまな調査・研究活動を続けています。地球温暖化や外来生物の影響などといった自然環境の変化が大きな問題となっているこんにち、森林生態系をはじめとする白神山地の自然の姿を解明し、その適切な保全・利用を図る方策を示すことは、世界に対する弘前大学の責務とも言えます。

白神自然環境研究センターの成り立ちと組織

このような背景のもと、長期の科学的な観察（モニタリング）によって環境変動を解明するとともに、動植物の分類学的・生態学的研究やその存立基盤となる気象や土地の研究を進め、また環境教育を推進することを目的として、2010年10月に弘前大学白神自然環境研究所が西目屋村川原平地区に設立され、ここには白神自然観察園も開設されました。研究所はその後の2018年3月には、

学内組織の変更により弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センターとなり現在に至っています。研究センターには植物、動物、気象・地象、および教育・文化の4つの研究部門があります。スタッフとしては、専任教員3名（石川幸男、中村剛之、山岸洋貴）のほか、学部内・外の教員9名が協力する体制をとっており、総合的観点での調査研究体制ができています（<http://www.hirosaki-u.ac.jp/shirakami/>）。

研究センターに附属する白神自然観察園（写真2）は、およそ18haの敷地面積があります。ここでは、ブナやミズナラが生育する落葉広葉樹二次林が主体となり、スギ・カラマツも造林されているほか、一部にはサワグルミを始めとした湿性の森林が分布しています。植物としてはこれらの樹木のほかに、日本海側の落葉広葉樹林に固有のシラネアオイ（写真3）をはじめとした約280種が確認されており、動物ではニホンザルのほかに、ツキノワグマ（写真4）やニホンカモシカの姿を見ることもあります。観察園には、最大で36名が学べる実習室、教員の研究室、さらに休憩室とシャワーを備えた教育研究棟もあり、屋内外で各種の調査研究が取り組まれているほか、学生の実習研修、学内外の諸団体の研修や観察会も開催されています。また、弘前大学の教員と市民が協働して組織している「白神キノコの会」の精力的な探索によって、2018年3月までに300種を越える担子菌類や子のう菌類（いわゆるキノコ）が確認されていますが、これは小面積の観察園としては全国的にみても特筆すべき成果といえます。これらの情報は学生や周辺の住民の方も利用しやすいブックレット（写真5）として出版し、上記の実習研修や環境教育などの活動に生かされています。

センターでの取り組み

センターでは白神山地を日本海側多雪地域のモデルとして捉え、観察園内のほかにも、この地域の主要河川である岩木川、赤石川、白神川の各流域で生態系のモニタリングサイトを設定しています。同時に、環境変動の影響が危惧される主要山岳の高標高域にも注目しています。

植物部門では、気候変動に対する植物群落の長期的変動の解明をおこなうために、植物群落組成のモニタリングサイトの設定（写真6）に力を入れるとともに、各種植物の繁殖生態の研究や、樹木個体の成長に与える気象要因の年輪気候学的研究にも取り組んでいます。動物部門では、主に昆虫相の把握（写真7）を通じてこの地域の特性を解明することに取り組むとともに、鳥類や魚類等の調査研究も実施しています。また、気象・地象部門では、リモートセンシングの技術も活用しながら、白神山地のブナ林を維持させる気温や降水量などの気候条件の把握や、多発する地すべり、土壌や水環境の研究を行っています。その中には、低標高ながら氷期の名残りともみられる白神岳（1232m）山頂の偽高山的景観（写真8）を維持する気候条件の解明という、全国的にも事例の少ない観測も実施しています。さらに教育・文化部門では、主にこの地域に縄文時代から暮らしていた人々の生活実態を把握し、自然との密接な係わり合いの中ではぐくまれてきた文化の特性の解明に取り組んでいます。

研究成果は、モニタリングを通じて地球温暖化の影響把握に資するだけでなく、それを地域や関係機関と共有することで、白神山地世界自然遺産地域の保全・管理の方策策定にも貢献すると期待されます。こうした成果はセンターの英文研究紀要“SHIRAKAMI-SANCHI”で発表されるほか、センターが開催するシンポジウム・セミナー等で学内外に公表しています。白神山地世界自然遺産はユネスコから、中緯度温帯が今後の環境変動で変化してゆく際の代表的なモニタリングサイトとしての価値を認められていることから、こう

したモニタリング自体が世界的な価値を持っているのです。

さらに、気候変化や外来生物の侵入などによってこの地域の生態系に多大な変動が懸念されることから、センターでは、“世界自然遺産「白神山地」における動植物等標本の100年サンプリング・保存事業（白神標本100年保存プロジェクト）”を立ち上げ、現在の動植物を保存・記録し後世に伝えることを目的として標本収集・整理にも取り組んでいます。これまでに植物標本約50,000点、動物標本約70,000点が収集され、その中には県内の植物を長年に渡って研究した細井幸兵衛氏が収集保管していた標本約32,000点も含まれており、それをもとにして2018年には、長年待望されていた「新青森県植物目録」を発刊しました（写真9）。これら標本の収集や整理は市民や学生の協力も得て行っており、環境教育活動にも繋がっています。

こうして収集した生物標本は保管して研究に用いるだけでなく、その一部は市民に公開して生物や自然への関心を高めることに活用することも可能なことから、2018年11月から白神山地の玄関口に位置する中津軽郡西目屋村に同村役場の協力を得て標本室を設けました。また、当センターの活動には学生や地域住民の方々との協働取り組みが多いことから、平成28年度からは住民に向けて、白神山地の自然を深く理解して解説できる人材を2年間で育成する「白神自然環境人材育成講座」を生涯学習教育研究センターと共に実施しています。

弘前大学は、世界的な価値がある一方で種々の課題もかかえる白神山地に半日もあれば行って来られる好立地にあります。教員と学生が、時には地域住民からの協力も頂きながら、チームを組んで調査・研究を行うことを通して、道の無い沢や山、手つかずの森などに自然の大きさや深さを学ぶこともできることから、白神山地は学生にとって人間形成の場にもなっているといえます。

(写真1) 白神山地世界自然遺産核心地域 クマゲラの森



(写真2) 白神自然観察園 不識塔から見た教育研究棟



(写真3) 観察園内のシラネアオイ



(写真4) 観察園内の定点カメラで撮影されたツキノワグマ



(写真5) ブックレット



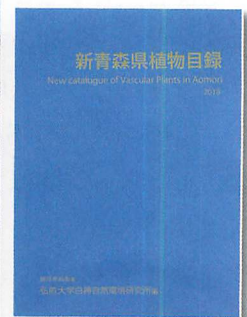
(写真7) 大沢川での昆虫調査



(写真6) 大沢川源流部調査



(写真8) 白神岳山頂の偽高山高茎草原



(写真9) 新青森県植物目録

研究トピックス

リンゴ園とフクロウとハタネズミ

生物学科教員 東 信行

ここ数年、弘前市のリンゴ農家の方々や博士課程のムラノ千恵さんとリンゴ園のフクロウを中心とした生態系サービスについて調べています。そもそもフクロウとの付き合いは大学生の時、昭和の終わり頃、バイクに乗って夜のリンゴ園を走っているときに農道を横切る白い物体を見たところから始まりました。バイクを止めおそるおそる近づいてみると、「ピチー」という甲高い音が夜空に響き、一瞬緊張が走りました。しばらくすると、「ゴロスケホッホ」という聞き慣れた鳴き声がして、その正体がフクロウであることに気づきほっとした気持ちを今でも鮮明に思い出します。

その時の経験もあり、弘前大学に赴任した直後からリンゴ園に棲むフクロウがどのようにリンゴ園で生きているのかの調査を行ってきました。青森県のリンゴ園では、かねてよりフクロウが繁殖することが知られていました。リンゴ栽培の歴史は長く、丁寧にリンゴ樹を管理し、品種を変更する際にも、幹や太い枝を活かして接ぎ木で行っていたため、太い幹を持った古木が多くありました。これらの古木の中には、払われた枝のあとなどから樹洞が形成されることがあります。実はこの樹洞が多くの野生生物にとって良い巣穴となっているのです。そして調査を続けてゆくと、リンゴ園のフクロウはそこで子育てをしている間、たくさんのハタネズミを捕まえていることが明らかになってきました。

大学の公開講座でその話をしたところ、弘前市内の年配の農家の方が寄ってきて、津軽弁でこういいます。「最近フクロウを見ねぐなった。昔はもっとたくさんいたんだ。そのせいでネズミの被害が増えたんでねえべか?」。農家への聞き取りや農業被害統計などを調べてみると、たしかにハタネズミによる食害が増えている傾向が見られました。そこで、農家と研究者の協働「巣箱作戦」を始めることにし、弘前市の下湯口地区の農家の方と作戦会議をおこないました。今度はフクロウを園地に誘致したときのネズミ駆除効果を調査しました。フクロウ繁殖期の密度変化は劇的なもので、その結果は英国生態学会の科学雑誌に論文として掲載されました。劇薬のように効かな

いだろう。でも在来種なので、生態系に対する副作用も少なくおそらくは風邪薬程度には効果があると考えていた私にとっては、それを証明できたことは非常に心強いものでした。

これと並行して、新聞各紙などマスコミでこれらの取り組みが紹介され、全国の果樹園のある地域に注目され始めた頃です。マメコバチに続く青森発信の生態系サービスとしてうまくいくといいなあと考えていたところに、一人の卒業生が研究室に現れました。生物生産科学科時代に学生だった、菅野舞さんでした。彼女はNHKのディレクターとなって青森局に帰ってきたのです。そして彼女と同じころ学生で現在研究室の博士研究員を務めている、工藤誠也君や前述のムラノさん、研究室歴代トップクラスの鳥キチ、原星一君らと3本の作品を作ることになりました。それらは「さわやか自然百景」「ダーウィンが来た!」「ワイルドライフ」として放映され、卒業生や各方面から連絡をいただくこととなりました。元および現の学生たちとのコラボをいろんな角度でたくさん経験でき、教員冥利という言葉の口にしてしまう近年の出来事です。



定年退職教員からの寄稿



山間地と災害地に学んだ20年

地域環境工学科 檜垣 大助

赤く実ったリンゴの木々が空からの目に飛び込んできた1998年10月、発足して間もない弘前大学農学生命科学部地域環境科学科に着任しました。瞬く間に時間は経ち、この春退職を迎えました。この間、農学生命科学部の各学科、また地域環境科学科・地域環境工学科の方々には大変お世話になり、まずは感謝申し上げます。

前職の建設省から土砂災害防止対策に関わってきましたが、弘前大学在任中で思い出されるのは、日本各地で大きな地震が発生しそれに伴って斜面災害が多発したことです。その度に原因究明や応急対策検討などで現地に行きました。東日本大震災では、学生とともに、損傷を受けて凹凸の激しい高速道を通して食料を持って被災地に行き、それが卒業研究に繋がったこともありました。地震以外では白神山地や北東北の山間地を卒論・修論のフィールドにすることも多かったので、研究室の皆で地形測量や地質調査のため斜面を上り下りし、夜は学生と語り合ってきました。フィールドを通じた教育・研究は大いに人育てに役立ったと思います。また、ネパールなど海外調査もよく行ったため不在が多く、学科や事務の方にはかなりご迷惑をおかけしました。この場でお詫び申し上げます。

大学も法人化し、教育・研究の成果だけでなく地域の発展に資する取り組みも求められるようになりました。学習教育目標の明確化や学生・教員による教育評価・改善システムなどが機能してきています。このような取り組みと弘前大学の現状をどう学生は見ているか、卒業・修了生へのアンケート結果から課題を見出し教育改善を図っていく学部の自己評価委員会の委員を3期務めさせて頂きました。同じようなアンケートを毎年取って何の意味があるのかと疑問の声もありましたが、アンケート結果は

変わってきており、学生の姿勢や考え方の変化、また、組織変更などの影響が見えてきます。外部評価などでは重要なデータとなります。一方で、世界遺産地域を中心とした白神山地の自然の解明と適切な保全・利用を考える白神自然環境研究所と学部移行後の同セ

ンターに6年間関わらせて頂きました。温暖化や外来生物の侵入などの影響をみるため、環境モニタリングを最重要課題にして研究が続けられています。学部への貢献はこの程度でしたが、いつも時間ぎりぎりでした。動かぬ性分で、これまた関係した方々にご心配をおかけしてしまい、平身低頭の限りです。



弘前は、食を通して山海の恵みを堪能し変化に富んだ自然を感じることでできる場所です。標高1625mの岩木山は、四季の変化を姿で現し、雲の出方などを通して毎日の天気変化を教えてください。程良い大きさと歴史のある弘前、さらに縄文時代からの文化が積み重なった津軽地方、これは学生にとって最高の学び・遊びの環境ではないでしょうか。手前味噌ですが、白神山地では木を乗せたまま毎年数十センチ位で動いている斜面が結構あることも20年の間に分かりました。森林が壊れることなく山が動いているのです。山の自然は面白く、それを知ってうまく付き合うことで減災と自然資源の利用が図られると思っています。退職後も、実務面で少しづつ山の防災に関わっていく予定です。家を出ると町より山に向かってしまう行動パターンは変えられなさそうです。

農学生命科学部また同窓生の皆様のご健康とご発展を祈りつつ筆を置きたいと思います。



平成30年度卒業生・修了生の祝賀会ならびに就職・進学先

平成31年3月22日に、平成30年度の農学生命科学部卒業証書授与式および大学院農学生命科学研究科の学位記授与式が行われた。今年度の学部卒業生は183名、大学院修士課程修了生は50名で、農学部と農学生命科学部をあわせた卒業生は7,846名、研究科修了生は1,152名となった。

学部203多目的室にて記念写真撮影の後、学部・後援会・同窓会共催の祝賀会兼同窓会歓迎会がコラボレーションセンター8階八甲田ホールで行われ、恩師や友人との別れを惜しんだ。



卒業祝賀会の費用の一部が同窓会費で賄われています。また、学部卒業・大学院修了記念写真の費用は全額が同窓会費で賄われています。

本年度の卒業・修了生の就職先および進学先は以下の通りである（括弧内に数字を記入した場合以外は各1名である）。（平成31年3月29日現在）

生物学科

(株) クリエイト・エスディー、(株) ライフフーズ、(株) 赤塚植物園、(有) グットドッグワン、花王(株)、公益財団法人横浜市緑の協会、山崎製パン(株) (2)、長谷部商事(株)、東武緑地(株)、栃木県警察、美和ロック(株)、北海道職員(2)、弘前大学大学院(18)、奈良女子大学大学院、奈良先端科学技術大学院大学、北海道大学大学院

分子生命科学科

(株) アルト技研、(株) ヴィ・ディー・エフ・サンロイヤル、(株) サンデリカ、(株) シイエヌエス、(株) マサール、(株) モンテール、(株) ユニバース、(株) 十文字チキンカンパニー、(株) 津田商店、(株) 日立ハイテクフィールドディング、(株) 弁釜、テンアライド(株)、バルテス(株)、階上キューピー(株)、五所川原街づくり(株)、石屋製菓(株) (2)、日立化成(株)、北海道公立学校、札幌国税局、青森労働局(2)、東北防衛局、北海道開発局、青森県職員、藤崎町職員、弘前大学大学院(8)、岩手大学大学院

生物資源学科

(株) セコマ、(株) ネオキャリア、(株) もりもと、(株) 新日本科学PPD、(株) 鈴木商館、きたみらい農業協同組合、キヤノンプレジジョン(株)、つがる弘前農業協同組合、マイクロンメモリジャパン合同会社、栄研化学(株)、新岩手農業協同組合、青森県職員、青森合同青果(株)、雪印種苗(株)、地方独立行政法人青森県産業技術センター、鶴岡市職員、東日本旅客鉄道(株)、東北化学薬品(株)、日本設備工業(株)、函館市亀田農業協同組合、福井キヤノンマテリアル(株)、北海道セキスイハイム(株)、北海道警察、北海道職員(3)、弘前大学大学院(8)

園芸農学科

(株) HCSホールディングス、(株) サングリン太陽園、(株) シイエヌエス、(株) シジシージャパン、(株) ネクストビート、(株) リジッドファームズ、(株) リンクステーション、(株) 横手水産物地方卸売市場、(株) 工藤パン、(株) 青南商事(2)、(株) 米澤牧場、岩手県職員、岩手県北自動車(株)、宮城県職員、国立大学法人宇都宮大学、

山形県職員、全国農業協同組合連合会、全国農業協同組合連合会 埼玉県本部、太子食品工業(株)、東北化学薬品(株)、独立行政法人農畜産業振興機構、八戸地域広域市町村圏事務組合消防本部、北海道職員(3)、弘前大学大学院(5)、北海道大学大学院(2)

地域環境工学科

(株) アルファ技研、(株) コサカ技研、(株) 西島製作所、TDCソフト(株)、いであ(株)、岩手県職員、気仙沼市職員、宮城県職員、国土防災技術(株)、札幌市職員(2)、三菱電機ビルテクノサービス(株)、山形県職員、青森県職員(5)、青木あすなろ建設(株)、東北農政局、日本工営(株) (2)、八戸市職員、福島県職員、北海道職員(2)、北村技術(株)、東京農工大学大学院

<大学院農学生命科学研究科修了生>

生物学コース

タイハイ(株)、富士通フロンテック(株)、(株) ミヨシグループ、(株) 奈良機械製作所、十勝農業協同組合連合会、(株) シバタ医理科、地方独立行政法人青森県産業技術センター、北海道糖業(株)、国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構、岩手県公立学校、北海道職員、長野県職員、青森県職員、岩手大学大学院

分子生命科学コース

ネクステージ(株)、アグロカネショウ(株)、(株) 進学会、(株) サーフビバレッジ、(株) 榎本、シミックファーマサイエンス(株)、栄研化学(株)、上北農産商事(株)、雪印種苗(株)、ニプロ(株)、興研(株)、一般財団法人日本食品分析センター、(株) ベジテック、岩手大学大学院

生物資源学コース

北海道立総合研究機構、ライオン菓子(株)、雪印種苗(株)、函館市亀田農業協同組合、(株) 神明、宮城県職員

園芸農学コース

紅屋商事(株)、全国農業協同組合連合会、ホクレン農業協同組合連合会、(株) 渡辺採種場、茨城県職員、秋田県職員

地域環境工学コース

大日本土木(株)、明治コンサルタント(株)

新任教員の自己紹介



君塚 道史 准教授（食料資源学科）

食品や生体の凍結保存について研究をしています。具体的には氷結晶の生成や氷結晶以外の濃縮層の変化が保存性向上の鍵となる為、これらの制御が研究対象です。凍結保存といっても、簡単に言えばタダ冷やしているだ

けなのかもしれませんが、これほど奥が深いのはその大部分が水で構成されているからなのでしょう。これまでの食品企業や大学教員の経験を生かして、新設の食品科学コースに貢献できるよう努力する所存です。どうぞ宜しくお願いいたします。



西塚 誠 准教授（食料資源学科）

平成30年4月1日付で農学生命科学部食料資源学科に着任いたしました。肥満やがんを含む生活習慣病発症の分子メカニズムの解明をめざし、これまで研究に取り組んでまいりました。今後は、疾患発症の分子メカニズム

の解明に加え、各種生活習慣病の改善に寄与する新しい食品成分の探索を行うことにより、地域の健康増進に貢献できる研究を精力的に進めていきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。



川端 二功 准教授（国際園芸農学科）

平成30年8月に着任しました川端二功と申します。専門は畜産学で、主に家畜が感じる味覚のメカニズムについて研究しています。家畜の味覚が制御できれば、食べさせた

い飼料を適切なタイミングで与えることができ、地域や世界の畜産が変わると考えています。これからの畜産業の発展に貢献できる学生を育てていこうと思いますので、どうぞお力添えの程よろしくお願い申し上げます。



樋口 智之 准教授（食料資源学科）

2019年3月1日付けで、農学生命科学部食料資源学科に着任いたしました。これまで水産物を中心にタンパク質化学、脂質栄養学、食品化学に係わる研究または管理栄養士

の養成に従事してきました。生まれも育ちも北国ですが、大学院修了後は茨城、埼玉、岡山と雪とはほぼ無縁の地を過ごしてきました。このたび縁があって北国に戻ることができ、食の研究・教育を通じて貢献していきたいと考えています。



津田 治 敏 准教授 (食料資源学科)

2019年3月に農学生命科学部食料資源学科に着任いたしました。専門は乳・乳製品および食肉を主とする畜産物の利用です。すなわち、乳酸菌や酵母などを用いた食品微

生物の制御と応用について研究しています。研究を通じて、食品衛生の教育と地域産業への貢献を達成できるよう努力してまいります。よろしくお願いいたします。



山元 涼 子 助教 (食料資源学科)

2018年4月付で食料資源学科の助教に着任いたしました山元涼子と申します。専門は栄養学で、これまで管理栄養士の養成に関わる大学で勤務しておりました。これまでの

経験を生かして地域の食材や健康課題と向き合いながら「食べ物と健康」を軸に研究・教育に励みたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



菅原 亮 平 助教 (食料資源学科)

2018年8月に当所属に着任いたしました。大学生までずっと福岡にいましたが、関西、関東と移り住み、ついには東北に至りました。研究対象は昆虫です。主に分子生物学

が専門で、最近は虫個体レベルの研究にも取り組んでいます。寒い弘前で虫を通年飼育するのは大変ではありますが、「研究は楽しく！」をモットーに、面白い成果を出していけたらと考えております。よろしくお願いいたします。



教職員人事

退職 (定年退職) 平成31年3月末日
檜垣 大助 (ひがき だいすけ)
教授(地域環境工学科)

採用 (新任)
君塚 道史 (きみづか のりひと)
准教授(食料資源学科) 平成30年4月1日
西塚 誠 (にしづか まこと)
准教授(食料資源学科) 平成30年4月1日
川端 二功 (かわばた ふみのり)
准教授(国際園芸農学科) 平成30年8月1日
樋口 智之 (ひぐち ともゆき)
准教授(食料資源学科) 平成31年3月1日
津田 治敏 (つだ はるとし)
准教授(食料資源学科) 平成31年3月1日

山元 涼子 (やまもと りょうこ)
助教(食料資源学科) 平成30年4月1日
菅原 亮平 (すがわら りょうへい)
助教(食料資源学科) 平成30年8月1日

(昇任)
前田 智雄 (まえだ ともお)
教授(国際園芸農学科) 平成30年4月1日
石塚 哉史 (いしづか さとし)
教授(国際園芸農学科) 平成30年4月1日
伊藤 大雄 (いとう だいゆう)
教授(生物共生教育研究センター藤崎農場)
平成30年12月1日
金児 雄 (かねこ ゆう)
准教授(食料資源学科) 平成30年4月1日
栗田 大輔 (くりた だいすけ)
准教授(分子生命科学科) 平成30年12月1日

会費納入と住所通知のお願い

令和元年－令和2年度会費5,000円を、同封致しました振込用紙でお納め下さいますようお願い致します。
転勤や転居で住所が変更になりましたら、事務局までご一報下さい。

同窓会事務局

〒036-8561 弘前市文京町3 弘前大学農学生命科学部同窓会

泉 完

加藤 幸 電話 0172-39-3869 E-mail katoko@hirosaki-u.ac.jp

濱田 茂樹 電話 0172-39-3772 E-mail shamada@hirosaki-u.ac.jp

令和元年－令和2年度同窓会総会開催のご案内

令和元年－令和2年度総会を下記の通り開催致しますので、ご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

開催日時：2019年7月6日（土）15：30～16：30

場 所：ラ・プラス青い森（〒030-0822 青森県青森市中央1-11-18）

電 話：017-734-4371

議 題：1	平成29－30年度事業報告	4	令和元年－令和2年度予算
2	平成29－30年度会計報告	5	令和元年－令和2年度役員
3	令和元年－令和2年度事業計画	6	その他

なお、総会終了後に懇親会（会費3,000円）を行います。準備の都合がございますので、ご面倒ながら、ご出席下さる会員におかれましては、6月21日（金）までに、情報幹事濱田（0172-39-3772、あるいは shamada@hirosaki-u.ac.jp）に、ご芳名、ご卒業年、学科をご連絡下さいますようお願い申し上げます。

同窓生近況だより

2018年6月23日、旧農業工学科、造構施設学教室が創設された頃の卒業生（6名）がさいたま市大宮駅前の銀座アスターに集い同窓会を行いました。卜蔵建治先生が参加され、先生にお世話していただいた当時の就職事情やその後の働きぶり等の話で盛り上がりました。



前列：写真に向かって右側から、齋藤一志、卜蔵建治先生、丸山和一
後列：写真に向かって右側から、赤間学、小西春雄、佐藤伸一、沼田祐一

同期会で弘前集合



2018年8月2日、第11回「弘翔会」(農学部S39年入学または43年卒業の同期会)を14年ぶりに地元弘前市の「星と森のロマンチックピア」で開催し、16名(県外8名)が参加して懇親を深めました。翌3日は水陸両用バスによる津軽白神湖での水しぶき湖上遊覧、夜は青森ねぶた祭観覧などで津軽ツーリズムを満喫しました。(青森県幹事 藤村建彦)



2018年12月15日に、篠邊名誉教授をお招きし愛知県在住の農業工学系卒業生8名が愛知県海部郡蟹江町の「いけす割烹元海」にて懇親を深めました。

それから、わずか40日後の2019年1月25日、先生のご訃報が入りました。先生とは毎年、愛知、岐阜、静岡、長野の農業工学関係の卒業生が集まり、農業土木の現場研修と課外授業(懇親会)を行っておりました。今年は静岡でお茶とワサビとミカンの畑を見に行く予定にしておりましたが…これからは先生の名講義が聴けないと思うと残念です。心よりご冥福をお祈りいたします。

訃報

篠邊三郎 名誉教授 (旧 農業工学科)
 坂下貞美 様 (農工 昭和33年卒)
 斉藤克夫 様 (農製 昭和37年卒)
 今 哲廣 元同窓会副会長 (農経 昭和42年卒)
 芝山哲雄 様 (農地 昭和49年卒)
 三上慎吾 様 (農地 昭和53年卒)

佐藤 進 様 (農経 昭和35年卒)
 西田一美 様 (農経 平成3年卒)
 石崎えりか 様 (応徴 平成7年卒)
 安宅道人 様 (農経 昭和63年卒)

上記会員のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

最新の情報は同窓会ホームページでご覧下さい (<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>)